The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	故永田理事長故松山教授を憶ふ
Author(s)	今井, 貫一
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 52-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

も翁は其相手の上下を問はず、決して物を強ひることはせぬが何時とはなしに吾方に引き付くる、一種不可思議なる靈光の所有者であつたことが知らるゝ。

重建懷德堂に就ては、理事諸君をはじめ縉士紳商の力を盡されたる所の大なることは、世人の等しく之を認め學海の爲に感謝して措かざる所であるが、特に翁の陽に薄くして陰に厚く、有形的に無形的に其盡されたりし事は、懷德堂先賢の靈よく明鑒し給はん、人間の筆と舌もてしてはいひあらはしがたし、重建懷德堂たゝもの果して何を以て之に答へんとするか、アゝ今や翁在さず嗚呼。（昭和二、九、二）

故永田理事長故松山教授を憶ふ

今井貫一

故永田仁助翁は大正二年懷德堂記念會創立以來の理事長、故松山直藏博士は大正五年懷德堂開講以來の教授でありました。申すまでもなく理事長と教授とは懷德堂の最も重要なる任務であるが、兩君は多年共に此重任に當られ、容易ならざる苦心盡力を爲されて懷德堂事業の擴充發達を圖られたのであります。私は記念會の初めから理事の末席を汚し、常に兩君に親炙して居りましたから、十有餘年

間に於ける兩君の功績に就て深く感銘して居るものであります。

回顧すれば、私が永田翁と初めて知合になつたのは明治四十五年三月十日の陸軍記念日でありました。この日私は師團に招かれ城東練兵場の両方小高い所で模擬戰などを見たのであるが、其時同席の西村碩園博士から紹介せられて翁と初對面の挨拶を交せました。蓋し此紹介は單に社交的常例のものではなかつたのであります。それは當時碩園博士は懷德堂再興を計畫し、而して昔時の懷德堂には創學の五同志を初め、專ら大阪町人が維持に任じたのであり、又これが當然であるから再興の懷德堂もこの前例は倣ひたい、且新懷德堂を支配する理事の首班には大阪の實業家中德望の高い人を推擧したいといふ考から、既に永田翁に其任務を引受けんことを交渉して略ほ承諾を得て居られ、又翁も私が博士の計畫に與つて居つたことを知て居られたから、出先ではあつたが博士の紹介となつたのであります。此時私は初めて翁の謦咳に接したのであるが、翁の如き名望の高い立派な人物を理事長に迎へ得ることによつて博士の計畫は必ず成功すると確信し窃かに前途を祝福したのでありました。

尙ほこれは後ちに考へたことあるが、昔しの懷德堂が享保九年大阪大火の直後、罹災の有志町人の盡力によつて設立せられたるが如く、永田翁も明治四十五年一月の南區の大火にて居宅は全燒し、其復舊未だ成らざるに、進んで再興懷德堂のことに盡力せられたのであつて、前後其趣を一にせるは不思議なことゝ思ふのであります。

さて永田翁が愈懷德堂に理事長とならるゝや、決して名義のみでなく實際の事業首腦者であつて、懷德堂の爲めには少しも勞を吝まれたことなく、唯學者をして其志を成さしめんことを純潔忠誠に希はれたのでありました。翁が心から懷德堂に盡されたことは多くの人が凡そは知つて居ることであるが、驥尾に附して局に當て居つた私は細大の事に處していつも翁の誠意に感激したのであります。翁は實に心から懷德堂を信し愛し樂んで居られ、常に喜んで學者の要望するまゝに盡力せられました。懷德堂創立の中心であつた碩園博士は其計畫の遂行を期すること極めて急進であつた。講堂の建設、各種授業の實行、基金の募集其他の諸問題を提げて矢つぎばやに理事長を攻めたてました。又松山教授も熱心に懷德堂の興隆を計つて、文科講義の開設、文庫の建設、漢學奬勵事業、基金の增募等それからそれへと絕へず種々の計畫を立てゝ理事長に要求しました。これらの請求はみな翁を目標として迫るのでありましたから隨分煩はしいことであらうと私は恐察したのであるが、翁は其要求に對して少しも厭ふ色を見せず、大抵は望む所に同意して其實現に盡力せられ、事成つて學者の滿足するのを樂とせられたのであります。申すまでもなく懷德堂は多數有志の協同に成るものであつて、決して永田氏の一建立ではない。それ故に如何に翁が配慮せられても必ずしも西村松山兩君の望む通りに成らぬこともあつたが、成るべく學者の志を成さしめたいといふのが翁の根本の考であるから、翁一個の力によつて出來ると思はれたことは即座に應じて碩園博士の急望を容れ、松山教授の要求を充たしたこ

とが屢ありました。

其一例を申すと、嘗て創立の際講堂の建築工事中に翁と碩園博士と私の三人が工事現場を分見したことがあつた。其時博士は工事の進捗せるを見て大に滿足せられると同時に突如として教授招聘のことを急務として發案せられた。然るに當時記念會には資金の殆んど全部を講堂の建築に投じたのであるから教授を迎へる資力はない。又翁も私も碩園博士こそ此講堂に立て講義を爲されることゝ考へて居つたから、博士の發案を寧ろ意外とし、教授は追て招聘するも暫く博士を煩はして開講せんことを切に請ふた。しかし博士は講義は分擔するが學主たるべき教授は必ず別に迎へねばならぬことを主張せられ、且かく講堂が落成に近くからは一日も早く教授を定めねばならぬと強く唱へられた。私はこの主張は止を得ぬことであるとしても、肝心の資金がないから難問題である、理事長に對する無理な注文であると考へて居たが、その時翁は一應博士の主張を聞かれてから、わけもなく直に其要求に同意し、且つ其經費は追て相當な基金が出來るまで、いつ迄も自から負擔すべきことを約せられ、議は即決したのでありました。翁のこの痛快なる斷案に私は頗る驚たのであるが、これは一に博士の志す所を成さしめたいといふ厚意に外ならぬのでありました。

右は唯一例であるが、長い間にかやうな事は屢あつた。碩園博士の要望は多くは急激であつたが翁はそれを柳に風の如く受けながら而かも努力を吝まれなかつた『碩園先生追悼錄』にある翁の追憶談中

に『懷德堂の今日あるを得たのは畢竟西村先生が始終積極の行動を執られたからである。私は何うかといふと性急のやうで少しゆつくり構へて居る。西村先生はゆつくり構へて居るやうに見へるがなか〳〵急込んで來る。時に或は辟易する事があるが、どん〳〵進んで來るから遂に西村先生に追隨して行かなければならぬやうになつて來る。云々』と述へられてある如く翁は決して學者の要求をむけに却けなかつたのであります。大正十四年の夏に漢學奬勵基金五萬圓を懷德堂に寄附せられたのも、漢學の維持を必要とする翁の所信に出でたことは勿論であるが、一面には西村松山兩君が豫てから支那學專攻の學者を養成したいといふ希望があつたから其志を翼成せられたものであります。それは初めて其寄附のことを私が承つたときにも翁は明かに左樣に云はれたのであります。

翁が精神的並に物資的に懷德堂に寄與せられたことを列擧するなれば限りがないが、私は翁の志は主として文敎の爲めに學者の志を成さしめること、即ち己を空しくして人に美事を成さしめると云ふ點にあつたやうに考へまするから、其一二の例を擧けて全班を推し、以て翁の懷德堂に於ける偉大なる功績を追懷し感謝するのであります。

松山敎授と私とは三高以來の同窓學友でありました。君は性格謹直、風貌端正いかにも懷德堂の先生に似合しいことは君に親しい人のみな知るところである、、その謹直端正は特に後に得られたる德性でなく、學生時代から既に備へて居られたもので、此點に於て君は儕輩から異彩を發つて居られた

のであります。血氣に逸つて粗暴に流れるとか、感情に動かされて輕卒に陷るといふやうな壯年の通有性は君には無かつた。事に處して着實、身を持すこと謹嚴であつたことは晩年の通りで、早く老成圓熟の風がありました。懷德堂の教授室に於て、いつでも端然として机に向つて居られた態度は、前に寄宿舍に在て高談放吟の間に肅然として讀書せられた態度と同じである。卽ち君は學生時代から旣に懷德堂の先生たる資格を有して居つたやうに思はれます。唯君は好んで柔道を修め、東京に移てから更に加納塾に入られたほどに斯道に熱心であつたから、それに依て聊か壯者らしい元氣を見ることが出來たが、其柔道も或は技術よりも精神の鍛練を主眼としたのではなからうかと思はれました。君が官立學校教授の榮職を捨てゝ懷德堂の如き最も地味な教育事業に從事せられ、終始渝らず孜々として勵精せられたのは右申すやうな性格の人であつたから出來たことゝ私は思ふのであります。

松山教授は右申すやうな性格の人でありましたから其日常生活は又極めて平靜であつたやうに私は見て居る。其平靜な生活も私が知つて居る前の學生時代數年間と後の懷德堂時代十年間から推して、恐らくは生涯を通じて變らなかつたことゝ思ひます。元來君の氣分が平靜であつたから如何なる場合にも君の擧措は落付いたもので、場當り風のことは少しもなかつた。先年懷德堂にて釋奠を執行した時の君の態度、又久邇宮殿下同妃殿下が懷堂堂に御成の節御前にて御說明を申上げられた時の君の態度など、嚴肅緊張であると同時にまた平靜であつた、從て其立派であつたことは參列者が皆敬服した

ところでありました。君は嘗て生死の岐路に立つたやうな大病に罹られたのであるが、後になつて私に其病氣のことを話された時にも、恰も醫者の話のやうに冷靜なもので少しも感傷興奮の言はなかつた。又君は不平不滿なことがあつても、それを話さゝ時に決して奇激に渉るといふことはなかつた。かやうに萬事に平靜であつたから君には時に臨んで大に人を感激せしむるやうなことや、又は逸話といふやうなことはあまりなかつたと思ふ。

松山教授が懷德堂最初の教授として幾多の計畫を實施して專心懷德堂の興隆を圖られ、文教上偉大なる功績を遺されたことに就ては私がこゝに喋々するを要せぬことゝ思ふ。私は理事として感謝し又友人として喜ふのみであります。松山君は教授として、私は理事として長い間には懷德堂の事に關して意見を異にし、互に相讓らぬこともあつたが、私は君の厚く懷德德をおもひ熟心之れに盡されたる誠意には常に敬服して居りました。大雨の夜などは君が講義に疲れながら家に歸らるる勞苦を察して同情に堪へなかつたこともあります。

君は廣島高師に在職中大患に罹られたが治療効を奏して健康を回復せられた。併し二度も大手術を受けたのであるから、その爲め何時壽命を縮めるやも知れぬといふことは君の念頭を去らなかつたやうである。私が招請のために君を廣島に訪ふた時にも、君は其點を氣遣はれて就任を難しとした理由の一とせられたのでありました。然るに大阪に來られてから後は幸に何の故障もなく健康を持續せら

れ、或時は研究のため支那に遊ばんことを思ひたゝれた。しかし此支那行に就ては碩園博士や永田翁が特に君の健康を憂へて容易に同意しなかつたのであるが、君自身は寧ろ不服で左程に心配せぬほどに元氣でありました。又懷德堂の講義が夜分であるから、玉出から堂まで遠い夜路を毎日通勤することは强健な人でも相當な苦勞であるが、君は謂ゆる罅のいつた身體でありながら一たびも之れを厭ふやうなことを訴へず、或時は歸途私の宅にまわられ、懷德堂の事に關して夜の更けるまで相談せられたことも屢ありました。かやうに君は至極健康であつたから、圖らずも、宿痾の再發と思はるゝやうな病氣で歿せられたのは寧ろ私には意外に思はるゝやうで誠に殘念の至りであります。

永田翁追憶談

土屋元作

（編者云ふ、左の談話は去る七月八日中央電氣倶樂部並に電氣協會主催の永田、片岡兩翁追憶談會席上に於て筆記したるもので茲に演者の校閲を請ふて登載することにした。）

皆さん、私は御指名を蒙りまして、此處に出ましたけれども、不幸にしてこのお二人の方には親しく